

第六十一話 令和元年 十月八日

【沼津兵学校＜二＞ 江原素六】

ご先祖さんが沼津兵学校と縁{ゆかり} あった拙者にとって
【沼津兵学校】は 語っておかねばならぬ明治維新の一隅である。

※

「ららぽーと沼津」が4日前にオープンしたとか。そのむかし、熊が出てくる山里。

「ららぽーと沼津」から車で南東に5、6分ほど下ったところに江原素六の銅像が立つ江原公園がある。子供ながら江原素六の名は知っていた。偉い人。どんな風に偉いのかは知らなかった。

※

慶応三年十月、大政奉還。江原素六（二十六歳）は幕府陸軍撤兵隊副隊長であった。江原、二回の長州征伐と鳥羽伏見の戦と出征している。

明治元年八月、七十万石に移封された徳川藩。アメリカ商船を賃借りし、品川沖から二日半をかけて清水港に到着。二万五千人を超える徳川藩士と家族が乗船していた。死人も出たと云う。

この折、官軍に乗っ取られた江戸から四万の幕臣家族が、陸路海路から駿河遠江二国に＜敗走＞した。

命カラガラ到着したものの、幕臣は明治政府に仕えるか。土着し農か商になるか。また、ほぼ無禄のまま徳川家に仕えるか。三つに一つの選択しかなかった。

福沢諭吉の云わんとした＜幕府に対する「瘠我慢」の情＞が試された。

元幕臣五千人が明治新政府の＜朝臣＞に。家族も一緒。一万五千人以上だったろう。

＜幕府に対する「瘠我慢」の情＞断ち切れず、一万五千人が廃藩置県で静岡県に残った。後年、茶畑を開墾。

わずかだが「おとまりさん」と呼ばれていた幕臣がいた。新政府の「お尋ね者」をかくまった。

鳥羽・伏見の戦いから北越の戦い 會津の戦い 上野の戦い 箱館の戦いで官軍に、この野郎と眼を付けられた幕府軍戦士である。

新撰組発祥の地、武州多摩の調布、日野辺りも徹底的に「お尋ね者」狩りがあった。

江原素六も「おとまりさん」だった。いまの沼津に隣接する駿東郡長泉町の豪農にかくまわれた。水野泡三郎と名乗った。

公武合体は水の泡だったとの洒落か。

それからまもなく、徳川藩庁から出頭命令。指名手配が解かれたことを知る。そして、徳川藩陸軍御用重立取扱に任命、阿部潜と共に「徳川家兵学校」設立準備に取り掛る。

明治元年十月、西周助（西周）を頭取として、沼津兵学校と同付属沼津小学校がついに発足にこぎつけた。小学校と云っても大学。沼津兵学校は大学院。博士教育。

いまラグビーが強い「麻布中学校」の校長を死ぬまで続けた江原素六。江原の功績はここでは触れない。書ききれないからである。が、一言。江原の教育方針は「蛸壺」に入れない。専門バカにしない。維新後の文明開化は西欧に追いつこうと専門バカの育成に奔走していた。素六、曰く。

「偉大な事業はことごとく欧米に占有され、彼らを羨むだけである。熱中しやすく冷めやすい性格は、病的なまでに国民性の中に浸潤しているが、青年においては、比較的その影響が薄い。青年諸氏は、たとえ知的には愚鈍だとしても、その体質を健全にし、その精神を健全にし、普通の判断力を養い、事の大小を問わず、進取的に、忍耐的にその効果があらわれるまで孜々として努めることが必要である。」

いまのニッポンジン、耳が痛い。

拙者のY染色体のご先祖さんも「おとまりさん」だった。豪農でなく、さもない商家。

拙者のミトコンデリアのご先祖さん、土着した茶畑開墾農家。